

阪神大震災 その後

避難所の子ども達とのひととき

山室 真知子

1月17日の阪神大震災に際して、当院では院内に設置されている「NGO地球交流委員会」を中心として、日頃から関連のある数病院、諸団体と連携しながら、避難所となった東灘小学校の救護所に拠点を置き、医療や介護活動を行った。その避難所に大勢の子ども達がいることを知り、地震の恐怖とその後の生活の著しい変化に動揺しているであろうその子ども達のために何かできることはないかと思いつけていた。しかし、ライフラインを完全に絶たれてしまったその当時の避難所の人々の状況を思うと「とても今は本や遊びどころではなかろう……」と諦めながら、ボランティア活動として医療班本部で「東灘小学校医療班ニュース」の編集作業に参加していた。その時思いがけず「避難所で『子ども図書室』を開いたら……」という本部の勧めがあり、飛びつく思いで早速その準備を開始した。東灘小学校には地域の公共図書館の本を備えた図書室があると聞き、本より子ども達と一緒に遊べる紙芝居と工作を用意することにした。工作は男の子には「紙飛行機」を、女の子には雛まつりを前に失ってしまったであろう「お雛さま」と決めた。

2月12日の日曜日に、紙芝居や工作の道具と材料、それにウェットティッシュまでも用意してリュックに詰め込み、子ども達の歓迎を期待して有志6名で出かけた。午後3時、子ども達の世話をしていたボランティアの学生と一緒に小学校内の市民図書センターの部

屋にドヤドヤと集まって来た子ども達、その手にはみんなシッカリとお菓子が詰め込まれたビニール袋や手提げ袋が握られていた。

「どうしてこんなに沢山のお菓子を？」と驚くほどに。そして、大きな子までが誰かれとなく大人にまとわりついたり、膝の上にあがったりして離れようとしなない。その子ども達の姿は、地震の恐怖と避難したときのひもじさに備えているかのように思われてならなかった。これで工作などやってくれるのだろうか。しかし、見本に作ったお雛さまや飛行機を見て「これ、作っていいの？」「持って帰っていいの？」、そして「やった！」と飛びついて喜ぶ子ども達に、無邪気さがまだ残されているのを見て私たちはほっとした。

地元の保育所の保母さん達の紙芝居やエプロンシアターが終わって、用意してきたお雛さまと飛行機づくりが始まった。思いのほか工作に専念する子ども達の姿に、「やっとなら自分で何かしよう」というところまで回復したのですよ」と、これまでずっと子ども達を見守ってきた「心のケア」のボランティアの言葉が心に残った。

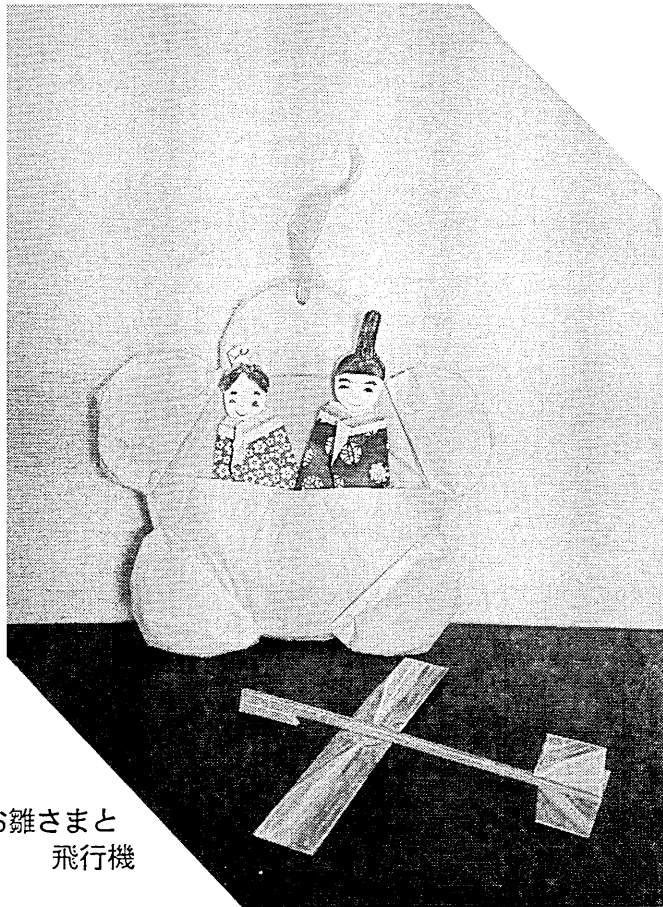
当日集まってきた子ども達は15～16人、そこに学生ボランティアや高学年の男の子も加わっての賑やかな共同作業となった。地震が起こった時の話を聞かせながら手を動かしている子どもや、決められた時間内に出来上がらずに、スタッフの控え室に持ち込んで完成させた子どももいた。そして、みんなそれぞれに出来上がったお雛さまや飛行機を手手に、避難している家族のもとに帰っていった。

やまむろ まちこ：京都市南病院図書室

陽も落ちた6時過ぎ、午後からの雨でぬかるみとなった校庭では、まだ自衛隊の入浴と炊き出しを待つ人々の傘の列が続き、見るからに「避難所」という寂しい風景が広がっていた。いそいそと家路につく多くのボランティアの後ろ姿をこの避難所の人々はどんな気持ちで見送っておられるのだろう。私たちには帰る「家」があるという後ろめたさを感じて足も竦み、いたたまれない思いで小学校を後にした。

後日、災害の直後に精神科医の加賀乙彦氏は、現地の精神科医中井久夫氏の要請で持て

るだけの生花を届けたという話を読んだ。また、他の精神科医が届けた「黄色い水仙の花がうれしかった」と当時を語る被災者の声がテレビで報道されていた。あの時、「遊びどころではあるまい」と思ったが、避難所の片隅に楽しい絵本やマンガの本がそっと並べられていたら、子ども達がホンの少しの間でも地震の恐怖を忘れるのに役立ったかも知れない。幸い、電気の復旧は早かったが、子ども達にとって避難所の夜はさぞかし寒く、そして長かったことであろう。



工作のお雛さまと
飛行機